第八巻
まおゆう
Archenemy and Hero
魔王勇者
「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」
原案 石田あきら
著 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・ioi8
Kadokawa Comics A
まおゆう 魔王勇者

我が同胞よ！
我が臣民よ！
我が呼びかけによくぞ集った！
魔族の繁栄よ永久なれ！
我
四十三代魔王『紅玉の瞳』は
ここに忽郷塔の開催を宣言する！
まおゆう
魔王勇者
第二十六話

Archenemy and Hero
26th chapter

第二十六話

大部族会議、忽鄰塔（クリルタイ）

あおやま
Archenemy and Hero 魔王勇者
——「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」——
漫画 原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

まおゆう
魔王勇者

第八巻

漫画 石田あきら 原作 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉猫之丞・toi8

第二十六話 Archenemy and Hero 26th chapter 001
大部族会議、忽鄰塔（クリルタイ）
第二十七話 Archenemy and Hero 27th chapter 057
最初の激突といこう
第二十八話 Archenemy and Hero 28th chapter 109
典範

まおゆう魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る!」

Archenemy and Hero

第八巻

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ

キャラクター原案
水玉螢之丞・toi8

コラムページ
竹之内大輔(レッカ社)
野村昌隆

まおゆう 第七巻のあらすじ

Lectures on Archenemy and Hero
Outline of volume.7

人間と魔族との戦争を真の意味で終わらせるため、手を結んで歩み始めた「魔王」と「勇者」。二人が人間界の「冬越し村」で活動を始めてから2年以上の月日が流れ、その影響は人間界に表れつつあった。魔王が「紅の学士」として「冬の国」にもたらした数々の知識や技術は、近隣の「鉄の国」や「氷の国」にも広まって人々の生活は改善。着実に力をつけていった三国は、「聖王国」と「中央教会」の干渉をきっかけに「三国通商同盟」を結成した。

これに対し、中央教会は紅の学士の異端告発という手段に出たが、紅の学士に変装した「メイド姉」と教会のやり方に反発した民衆によって失敗。この一件を受けて、同盟諸国の王たちも聖王国を頂点とする中央からの独立を決意した。中央教会と聖王国は、彼らを破門と宣戦布告という形で圧力をかけるが、同盟諸国は「女騎士」が所属する「湖畔修道会」を新たな国教に制定。宣戦布告に対しては開戦を引き伸ばし降雪を待つ作戦を実施することで対応し、本格的な戦争への突入は回避された。この結果、それまで聖王国と中央教会によって支配されていた人間界において、三国同盟諸国はまだ小さいながらも新たな勢力として台頭したのだった。

こうした情勢のなか、人間界最大の経済団

体「同盟」に所属する「青年商人」もまた、小麦を用いた二大通貨制の確立を目指して活動していた。さらに彼は、塩を求めて人間界にやってきた「火竜公女」からの依頼を受け、魔界の「開門都市」と通商するための準備を開始する。

このように人間界で情勢

の変化が進んでいた頃、魔界に帰還した魔王は、「メイド長」と「黒騎士」に変装した勇者を伴って、久々に魔族たちの前に姿を現わした。彼女は、集まった魔族たちの前で、魔族の大会議「忽鄰塔（クリルタイ）」の開催を宣言。その目的は、魔界を代表する八大氏族の氏族長を説得し、人間との戦争に和平を迎えるためであった――。

魔王

真の意味で魔族と人間の戦争を終わらせようとしている魔族の王。魔族の各氏族に対して人間との停戦を働きかけるため、魔界の大部族会議である「忽雕塔（クリルタイ）」の開催を決定した。

メイド長

魔王が幼い頃から彼女の世話をしている側近。魔王の夢を果たすため、その手足となって尽力している。魔王の幸せを心から願っている。

青年商人

人間界最大の経済団体「同盟」の幹部。人間界の変化に乗じ、二大通貨制の確立を計画した。火竜公女との契約で魔族との通商を模索している。

メイド姉

魔王の館で働く元農奴のメイド。魔王の元で学んでいた。魔王不在時の代役を務め、弾劾の場での演説が人々に意識の変革を促した。

火竜公女

火竜大公の娘。父を破った黒騎士（勇者）を夫になる人物と決めている。開門都市の代表として人間界を訪れ、青年商人に塩の入手を依頼した。

火竜大公

魔界における八大氏族のひとつ、竜族の長で、火竜公女の父。自身を負かし、約束通り開門都市を取り戻した黒騎士（勇者）を買っている。

勇者

魔王とともに歩むことを決意した青年。彼女の夢を実現するために各地を奔走している。魔界では、魔王の側近 黒騎士として活動しており、「忽鄰塔」では常に彼女の側に控えている。

女騎士

かつて勇者と旅をしていた仲間。魔王の正体を知りつつも彼女に協力している、よき理解者。勇者に剣を捧げるという、宿願を果たした。

女魔法使い

勇者と旅をしていた仲間のひとりで、強力な魔法の使い手。実は魔王と同じ一族だったことが判明。小説「こきげん殺人事件」の著者でもある。

執事

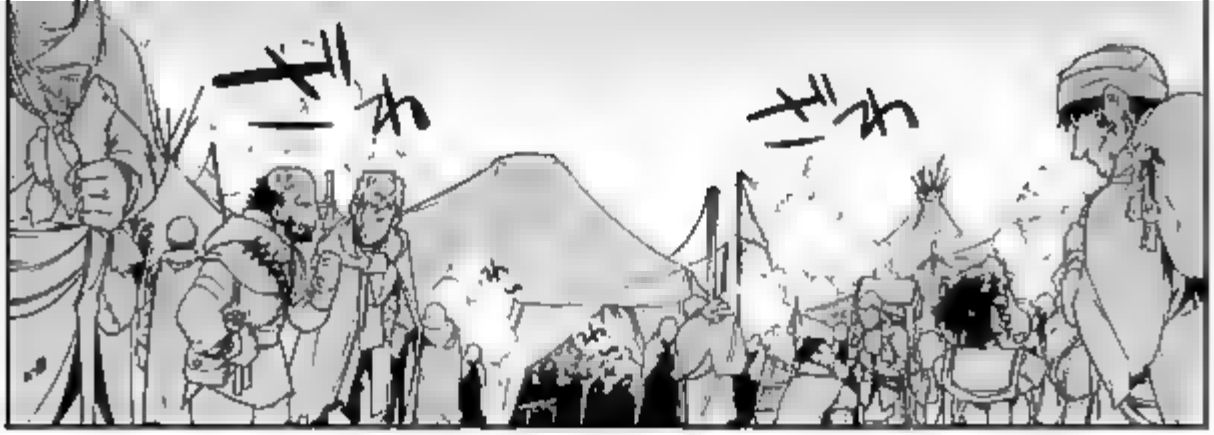
勇者と旅をしていた仲間のひとりで伝説的な弓の名手。現在は執事として冬の国の冬寂王に仕えており、諜報活動なども担当している。

東の砦将

開門都市に駐留していた聖鍵遠征軍の部隊長。遠征軍撤退後は開門都市に住む人間の代表を務め、魔族との関係改善に取り組んでいる。

妖精女王

平和的な妖精族の女王。武力なため争いは好まず、人間との戦争に反対している。黒騎士（勇者）に助けられたこともあり、好意的。


ざわ
ざわ

そんなふうに
覗かれていると
不審に思われますよ
おいおい
すげぇな！

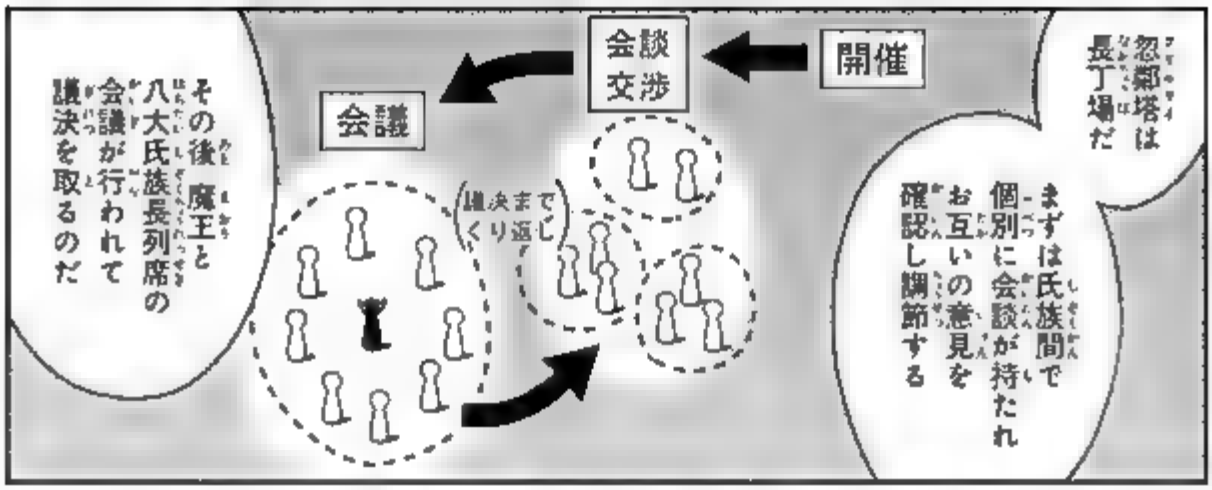
まるで
街みたいだぞ
小さな街程度の
人は集まっている
だろうな

忽郎塔に
集まるのは
氏族の主だった
者たちです

各氏族の
主だった実力者
小さな氏族の
者たち

でも
そういった
参加者を
目的に集まる
商人や芸人
売り込みに来た
戦士たちも
集まるんですよ
忽鄰塔には
参加する何倍もの人数が
詰めかけるのが
常のことなんです
ほー

これからの予定はどうなってるんだ？
今日は各氏族の長との挨拶となっています
今日で終わればいいんだけどな
え!?
挨拶だけで数日かかるような規模なの!?
流れを簡単に説明しておくか


忽鄰塔は長丁場だ
まずは氏族間で個別に会談が持たれお互いの意見を確認し調節する
開催
会談交渉
会議
（まとまるまで繰り返し）
その後 魔王と八大氏族長列席の会議が行われて議決を取るのだ

議決は全会一致が原則だ
意見がまとまるまで何度でも会議や交渉を繰り返す
とびいろ 基本いつも二か月くらいが限度だな
それまでに意見の統一ができないと忽鄰塔は解散…
議題は持ち越しになる
意見を統一させるため反対派を消し炭にしてしまった魔王もいたという——

それは…
もちろん
力ずくなんて
私の柄じゃない
そもそも
できないしな
地道に交渉を重ね
説得して折り合って
いくしかないだろう
そのためにも
今日の挨拶で
各氏族の出方や姿勢を
確認する必要がある

八大氏族のことは…
昨日説明したな？
ああ
よく覚えてるぜ

よし
それを踏まえて
長たちの動静を
よく見張っていてくれ
ああ
さあ
行くぞ！

おひさしゅうございます
魔王様
我ら人魔族一同
魔王様のご快癒を
心からお慶び
申しあげます

人魔族は
もっとも数の
多い魔族だ
姿形は
人間に
似ているな
ほとんどの者は
ちょっとした変装で
人間社会で暮らす
ことができるだろう
人魔族は
数が多い上に
混交や
他の種族からの
流入も多い
生粋の人魔族は
紋様族や秘眼族
くらいだろうな

我が治世ももはや
二〇年に達する
人間の軍が
ゲートを越え
魔界に攻め込んで
きてより十七年
人間に奪われた
開門都市は我が剣
黒騎士によって
奪還され
ゲートもまた
黒騎士に命じ
破壊した

人魔族は
開門都市にも多く
住んでいる
人間が和解不可能な
侵略者ではないことは
ご存知であろう

人間界と魔界は
もはや反目しあう
別世界ではなく
ひとつの世界だ
この新しき世界に
ふさわしき道を
歩まねばならない

無論
我ら人魔族も
その新しき道を
共に歩む所存です

ですが
我らが歩むのは
あくまで中道…
戦いにも共和にも
偏るものではありません

我らは数も多く
種族も姿形も
多彩…

道の端を歩いては
こぼれるものも
あるでしょう

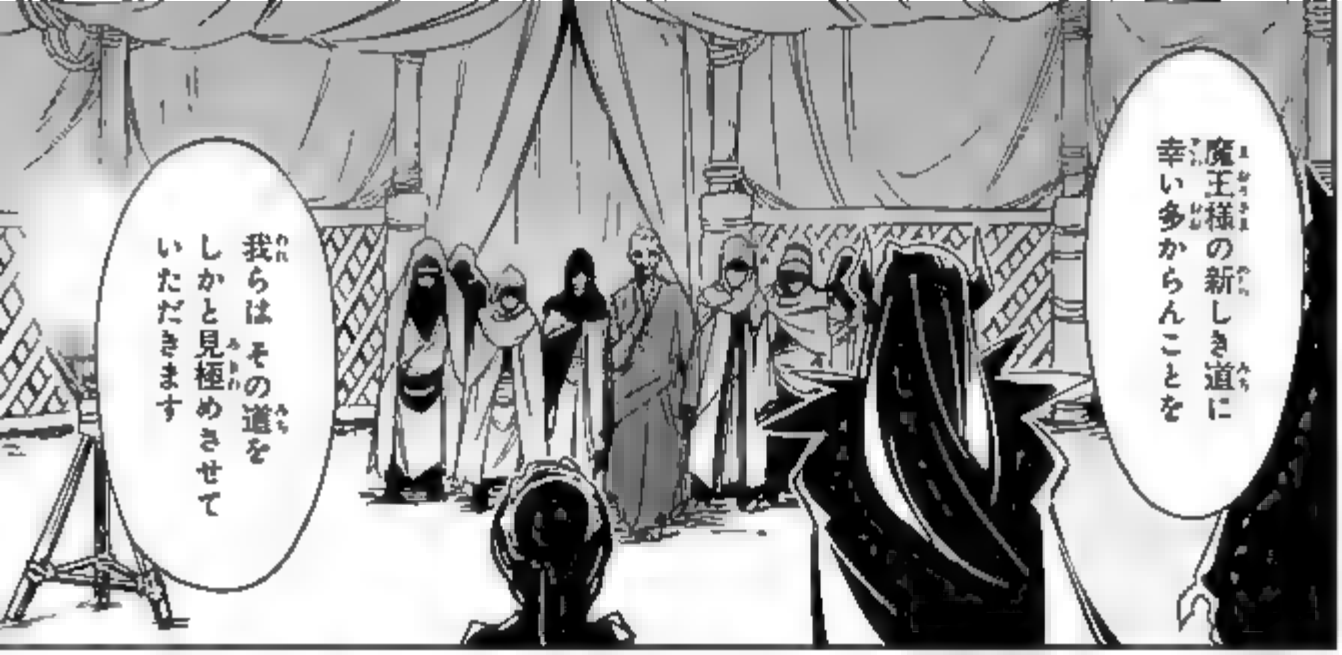
個人としての
人魔族は
好奇心が強く

その場その場の
状況に臨機応変に
対応してゆける
逃中だ

その ある種
要領がよい
ところが

氏族として
まとまってしまうと
日和見的な態度に
なってしまう

なるほどな


魔王様の新しき道に
幸い多からんことを
我らは その道を
しかと見極めさせて
いただきます

次に来る蒼魔族は
人間界侵攻論の
急先鋒だ
エリート意識も強く
もっとも厄介な
相手といえよう
あいつらか…
気を引き締めて
かからねば
なるまいな
おう！

魔王様に
おかれましては
ご機嫌麗しく
歴史ある
忽鄰塔の開催を
我ら蒼魔の一族を
代表してお祝い
申しあげます
う
うむ

いやいや
失礼ながら
魔王様のことを
見誤っておりました
先の戦争では
積極的な策を
とることもなく
陣頭で
戦われることも
ありません
でしたからな
しかし…

魔王様が
かの勇者との
華々しい一騎打ちに
勝ち残ったことには
驚きと尊敬の念を
禁じえませぬ
さらに
黒騎士という
屈強な将を
迎えられたこと
誠に喜ばしく
思います

蒼魔族は
強力な部族だ
数としては
人魔の半分も
いないだろうが
身体能力と
魔力に秀でていて
個体能力が高い
戦士が尊ばれる
軍人国家的な
性格をもっている

氏族内部では
完全な階級社会を
築いていて
蒼魔族の族長は
他部族の族長とは
別次元の権限を
もっている
純血主義で
蒼魔族に
生まれた者
以外を
自分たちの
氏族として
受け入れた事例は
存在しない

魔王様の力と
黒騎士の力があれば
人間など恐るるに
足りませぬ

いや
い

すぐにでも
軍を発し
人間どもの
国々を蹂躙して
やりましょうぞ

!!!

……!
そのことだ
及ばずながら
我が蒼魔の軍も
必ずや力に
なりますぞ

私がケガで
臥せっている間に
蒼魔族が人間界に
単独で侵攻した
ことについて
説明してもらいたい

なぜ 私の許しもなく
軍を動かしたのだ？
これは心外

かの獣牙族の
南氷将軍が
治めていた
極光島は
人間界への
重要な
侵攻拠点です
魔王の不在をつく
卑怯な人間どもに
奪われてしまっては
魔王の臣民として
忸怩たる思いを
隠せませぬ

魔王様が
傷を癒して
おられた間
我々が魔王軍の
威厳を取り戻すべく
立ち上がるしか
なかったのです
：しかし
ながら

まことに
お恥ずかしい
ことながら
我が蒼魔の軍は
卑劣なる人間の
魔法によって
敵と一戦を
交えることもなく
魔界に送り返される
という失態を演じ…

魔王様の軍として
恥ずべき仕儀
詫びの言葉も
ございませぬ
……

ガス……
つきましては
魔王様に
献上したき物が
ございます
パラッ…
今回の地上侵攻を
指揮した者の
首でございます

どうか
この首ひとつで
お収めくださいます
ように願います

冗談ではない
停戦など
ありえん

人間は侵略者
我ら魔族の
不倶戴天の敵だ

しかし 彼らも
知性も文化もある
魂もつ者だ
戦うばかりではなく
理解することも
必要ではないか
理解はしている
やつらは弱い
それゆえ
群れ
狡猾で
ずる賢いのだ

獣牙族
獣の身体の一部を
身体の特徴として
もっている民族だ
その特徴によって
さらに細かく
さまざまな氏族に
分かれている

彼らは
あまり都市には
住まない
山野に
城塞などを作り
そこに住む
ことが多いな
文明程度は
遅れた民族だが
そのぶん
戦士としては
強靭だ

彼ら獣牙族が
要求するのは
ひとりあたり
数十口四方の
「狩り場」なんだ
地下世界では
最近耕作面積が増えて
原生林の伐採や
開拓が進んでいる
彼らは地上世界に
新しい居住空間を
求めているのだ

しかし…
ならば
魔王はやつらと
刃を交えたことが
あるというのか
先陣で
戦うこともなく
やつらについて
語るとは
片腹痛いわ
おお
そもそも
キサマのような
弱い女が
魔王であることが
疑問なのだ
そこまでだ
ゴゴ

それ以上の
無礼は許さぬぞ
む
黒騎士か

黒狼族を
殲滅したという
噂は聞いている
なるほど
多少 部下には
恵まれている
らしいな

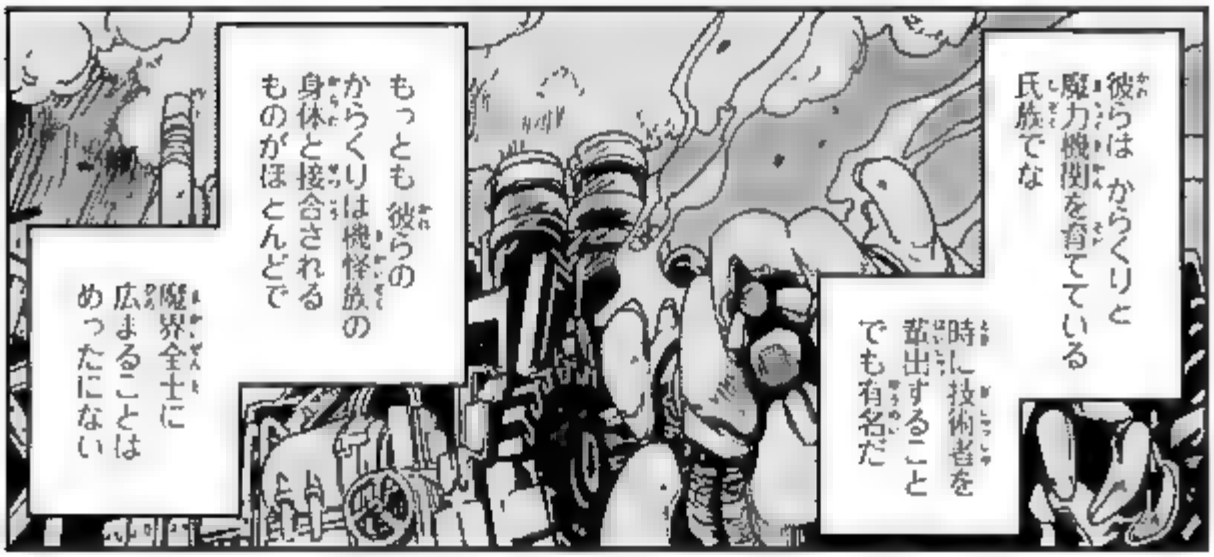
だが
魔王が姿を
消している間に
卑劣な人間の
策によって
我が朋友・南氷将軍が
討たれた

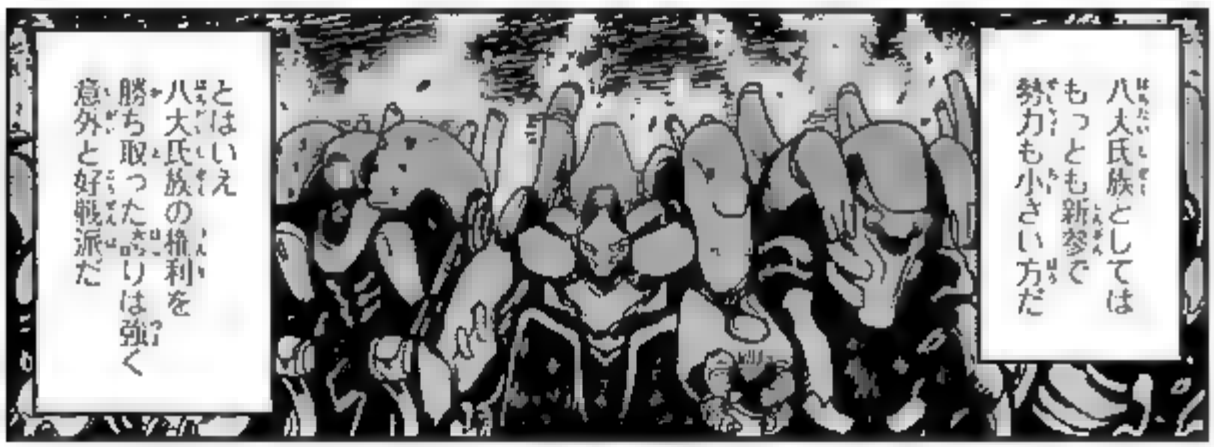
血は血によって
贖わねばならない
やつらとの戦は
避けられん

ゴゴォォォォ…

久しいな
肉の身体の
魔王よ
駄肉の
魔王だと…？
…？

機怪族
魔族のなかでも
相当に変わった
連中だな
機械仕掛けの
鎧みたいな
連中だ
その体を
維持するためか
繁殖のためか
常に鉱物資源を
求めている


彼らは からくりと
魔力機関を育てている
氏族でな
時に技術者を
輩出することも
でも有名だ
もっとも 彼らの
からくりは機械族の
身体と接合される
ものがほとんどで
魔界全土に
広まることは
めったにない


八大氏族としては
もっとも新参で
勢力も小さい方だ
とはいえ
八大氏族の権利を
勝ち取ったからりは強く
意外と好戦派だ

ナゼ人間との戦いを
避ける必要がある？
そもそもヤツらは
侵略者ではないか
お互いの拠点を
失った今
和平や停戦の
選択肢が生まれるのは
当然のことだ

ワレラは
常に勝ち取ってきた
戦いを
避けるつもりは
ワレラにはない

ワレラには鉄鉱石が
鉱物が必要なのだ
人間世界には
まだワレラの見ぬ
鉱物もあろう

…なるほど

では
それさえ手に入れば
戦う必要はないのだな

…なに？

あれは何のことだったんだ？
じきにわかる
しかし
よくわからない奴らだな
何度でも
彼らは八大氏族でももっとも謎の多い氏族ですからねぇ
あの鎧のような外見がからくりなのか本物なのか…？
ああ
あれはからくりだよ？
中に女の子が入ってるんだ
魔力伝導糸とかで動かしているんだよ
はじめて見たときは
ビックリしたもー
またフラグも立てて…!!
なんのことだ!!

黒騎士殿がおれば
戦いの勝利は
間違いなかろう
なぜ それを
躊躇するのだ

私も戦いが
必要な時に
躊躇する
つもりはない
だが
戦いしか
選択肢がないように
思う風潮を
改める必要があると
思っている

竜族もまた
高い戦闘力と
英知を秘めている
彼らも山中に住み
あまり他の氏族と
関わろうとはしない
孤高の氏族だ

ふむ
なるほどな
黒騎士殿は
真の勇士
それを従える
魔王の言葉を
疎かにはせぬ

さすが火竜大公は
なかなか話が
わかるなぁ
うむ
積極的な停戦派
というわけでは
なさそうだが
中立の立場には
なってくれそうだ

そういえば
大公の娘
火竜公女は
どうしておるのだ？
いや
それが最近は
開門都市に行っても
会えないんだよな
どっか
行ってるのかな…

人間…
ずるい…

我々
戦う

人間
殺す
攻めてくる

昔に人間と
巨人族との間に
いさかいがあったのは
聞いている
だが それは
人間の本質の
すべてではない
嘘…だ

巨人族
体が非常に大きく
力持ちだ
山に住まう者
森に住まう者
丘に住まう者などがいて
性質もさまざまだ

なかには
乱暴者もいるが
それも「乱暴」
程度であってな
凶暴とまではとてもいえぬ
話してみれば
素朴で素直な
連中だといえよう

彼らの先祖は
どうやら地上世界に
何回か出たことが
あるらしくてな
どうも人間には
よい感情を
持っていない

「巨人を騙して
無理矢理働かせる
意地の悪い人間」
というのは
巨人族全体で
語り継がれている
それこそ
子どもでも知っている
物語なのだ
彼らは地上世界に
関わることを
望んではいない

巨人族は
人間と関わりたく
ないのだろう？
ならば
戦争する必要も
ないではないか
人間
嘘をつく
人間
ずる賢い
戦争…しないと
言っても…
信用…できない
ズン…
やはり巨人族の
人間への不信感は
相当なものだな
ああ

まあ
でも
約束を
守らせるのが
政治の仕事だ
そこを信用して
もらえるように
説得すれば
消極的ながら
停戦の流れに
乗ってくれる
かもしれん

我々 鬼呼族は
外からの圧力には
決して屈せぬが
外への渇望は無い

おお
では…
戦いをせずに
すむのであれば
それに越した
ことはない

鬼呼族は
角をもった
氏族だ
地下世界の東側を
領域としている

魔族のなかでも
器用な連中で
魔法のような
力を使いこなす
者もいるな
魔物を使役する術も
得意とする

…だが

血を見ずに
済ますことが
できるほど
ぬるい情勢では
あるまい？
その流れる血を
なるべく少なくするのが
私の仕事だ
フ…

ご無沙汰して
おります
魔王様
黒騎士様
魔王様の復帰と
忽郷塔の開催を
妖精族を代表して
お祝い申しあげます
？
やっと話が通じる
相手キター

黒騎士様
黒狼族の件では大変お世話になりました
あれから奴らはおとなしくしているか？
はい
私たちは妖精の森で心穏やかに暮らすことができています

妖精族
元来は森に住む小さな魔族の総称だったが
時を経ることにだんだんと融和し大小様々な外見のものが共存している
総じて外見が美しく
飛行能力や自然と調和する術をもつものが多い

彼らは ほとんど
唯一といってもよい
人間共存派だ
聖鍵遠征軍からの
被害にも
あっていないし
悪感情をもって
いなかったんだろう
妖精族は
基本的には
ちょっと
イタズラ好きだが
戦争嫌いの
臆病な辺中だ

彼らは魔力こそ
そこそこあるが
戦闘能力が
低い
魔族同士の
戦乱の世では
まっ先に犠牲に
なっていた
という歴史が
あるからだ

妖精女王
貴女を見込んで
お願いがあるのだが
はい
私たちに
できることなら
なんなりと

妖精族は姿形で
人間に忌避される
ことも少ないし
妖精族自身も
人間に悪感情を
もっていない
もし 人間との
和平交渉を
行う場合は
妖精族に
特使などの役目を
お願いしたいのだが
いかがだろうか

そのような
ことでしたら
ぜひお任せください
人間にも魔族にも
平和への道を
つくることが
できるなら
これに
勝ることは
ありません

ありがとう
心強い限りだ

やっと
終わったー

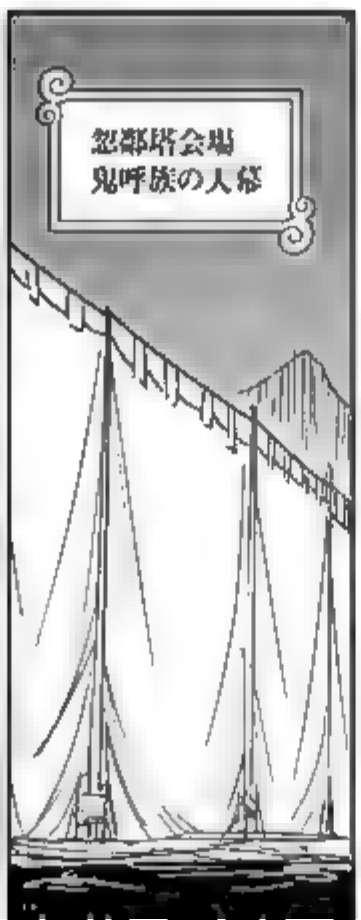
何を言って
いるんですか
まだ八大氏族が
終わっただけですよ
え？

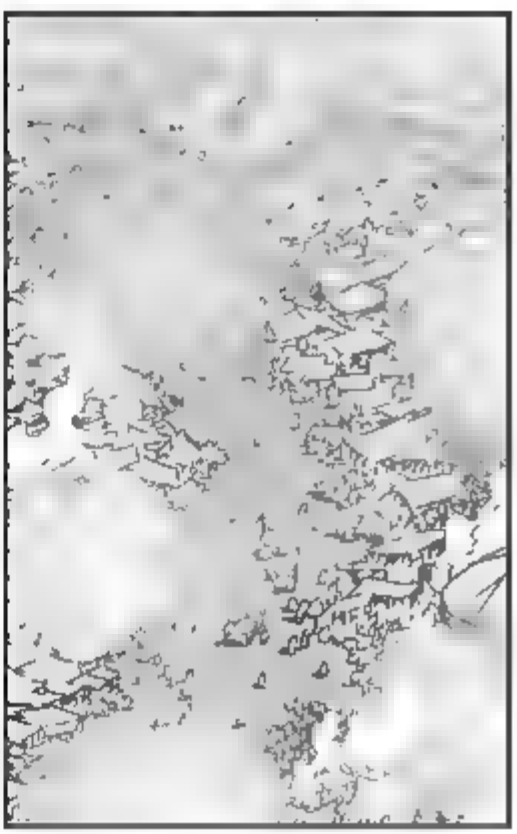
でも 忽鄰塔の
会議は…

忽鄰塔の会議に
参加できない氏族も
たくさん来て
いるのです
中小の氏族とはいえ
挨拶を欠かすことは
できません
そ
そうなのか

予定では
あと40ほどの
氏族がお待ちです

来ていると思ったら
あり得ません！
ギャー


忽都塔会場
鬼呼族の大幕



今の魔王は
停戦を望んで
いるようだ
では
我々も…？

我が鬼呼の地は
極…ゲート跡
とは遠い
人間界へ
兵を送るのも
領土を維持するのも
難しかろう
我らとしては
停戦することに
異議はない

しかし…
我らが停戦派に
なっても
意味が無いやも
しれぬな

……！
やはり…？

ああ

何度
占っても変わらぬ
魔王の命脈…
まもなく尽きる

ガタン
ゴトン…
いやあ
助かったよ
盗賊に襲われた時は
もうダメかと思ったぜ
旅は助け合い
ですからな
気にすることは
ありませんぞ

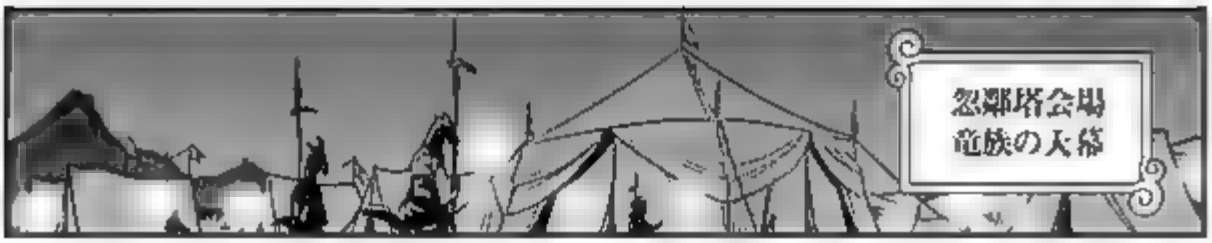
それにしても
爺さん強いなぁ
ほほほほ
こう見えても
昔はアイアイ
言わせてたのですぞ
ところで
忽鄰塔…
でしたかな

それは
いったい？
おう
何十年かに一度
行われる
大会議でな
魔王様や
大氏族も
来るほどだ

そこでなら
この玉蜀黍も
売れるだろうし
新しい商売も
あるかもしれないと
思ってな

乗せて行って
もらっても
かまわない
ですかな？
おうよ
旅は助け合いだろ
気にすんな

ガタン
ゴトン
…忽鄰塔
魔王もその姿を
現わすという
魔族の戦略会議…
情報の価値は
無限に大きい
でしょうな


忽鄰塔会場
竜族の天幕

失礼します
公女様の
紹介状を持っている者が
大公様にお会いしたいと…
公女の…？
こんばんは
お邪魔します

人間
貴様
何者だ
何を
しにきた？

人間の世界で
商売を営む者です
竜族の長
火竜大公
貴方を
倒しに参りました
終
第二十六話

第二十五回

氏族制度について

氏族は同じ祖先をもち
血縁という絆で結ばれた集団だ。
かつての社会では氏族自体を
政治機構に組み込んだ例もある。

魔族は数多くの氏族で構成されており、
忍耐塔に集まっただけでも数えきれないほど。

血縁集団である氏

古来より人間は家族を最小単位とする集団で生活してきた。学問上、こうした集団にはいくつか種類があり、同じ祖をもつ血縁同一の集団を「氏族」という。そして、氏族を政治組織として活用し、制度化したものが「氏族制度」だ。

古代の日本に誕生した大和朝廷は、豪族が労働力となる民を率いていることを前提として朝廷に奉仕させ、かわりに朝廷における地位と民衆を掌握する権利を与えていた。氏姓制度という名は、その際に豪族たちに役職や地位を表す氏と姓が与えられたことに由来する。

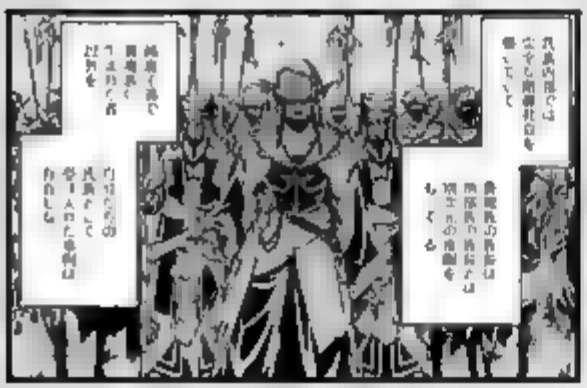
時代が進むと、彼らが率いる一般民衆も氏姓を名乗るようになった。これにより、血縁ではない人々も含めた一族も氏族と呼ばれるようになってくる。

氏族が政治機構に組み込まれた例は外国にもある。例えば、日本と同じく島国のイギリスでは、北部のスコットランドで10世紀以降に氏族制度が誕生した。ただ、スコットランドの氏族は王権に従ってはいたものの、日本の豪族とは違ってほぼ完全な自治権をもっていた。力関係は氏族のほうが強く、王権への従属は名目といってよいほど軽いものだったと見られる。

古くから、血は水よりも濃い」というように、同じ血族であるという一体感から生まれる結束は強い。イギリスの場合、流入した複数の異なる人種が氏族を形成していた。氏族同士の違いが大きいだけに、人々の帰属意識はより強く氏族に向き、国家としてはまとまりにくかったのかもしれない。

本作では、魔界で暮らす魔族のなかに氏族の存在を確認できる。ひと口に魔族といっても、外見をはじめとする氏族同士の差異は人間の人種以上に大きい。人間との戦争が始まる以前は、魔族同士での争いが絶えなかったというが、これは当然だったのかもしれない。そして、彼らを束ねている魔王にしても、神のような絶対的存在ではなく、有力氏族による連合体の頭領といったところのようだ。

忍耐塔での決議が全会一致を必要としているのも、それだけ氏族の長たちの力が強いということの証なのだろう。



戦争推進派の筆頭である各魔族。
魔王が目指す世界の実現には 彼らの説得が必要だが

その頃、子弟は

乾杯～！！
カンバイ！
…でござる！
久しぶり
冬越し村もしばらくぶりでござるね
元気そうで何よりだね
元気そう…
？
…に見えるでござるか
出世頭はやっぱり商人子弟だね
財務長でござるからな
よしてくれよ
軍人子弟こそ護国卿だって？
名ばかりで仕事ばかり増えるでござるよ
貴族子弟も赤馬の国での活躍を聞いたでござるよ
あれは吟遊詩人が誇張して歌っているのさ
ところで師匠からの仕事は？
ああ
大変だったでござる
しかしこんな物を何に使うんだろうね
師匠の考えはわからないねぇ

まおゆう
魔王勇者
第二十七話

第二十七話 Archenemy and Hero 27th chapter

最初の激突といこう

人間の世界で
商売を営む者です
竜族の長
火竜大公
貴方を
倒しに参りました

…？

商人風情に
そのようなこと
できるのか
できません

実はさる契約が
ありまして
商業上の道義的な
責任において
私はその契約に
縛られているんです
その契約者との
約定に基づき
「火竜大公を
こてんぱんに
してこい」と
このような
わけでして

…ふん
我の前に立ち
戯言を述べた
度胸に免じて
命は助けてやる
どこへなりと
消えるがいい
そうも
行きません
降伏も解約もできない
案件でして…

そこでお願いがあるのですが
…負けてはいただけませんかね？
…どうやら死に急ぎたいようだな
安心しろ…熱さを感じることもない
一瞬で塵も残さず焼き尽くしてくれよう
ゴッ
…塩？

海のない魔界…
地下世界において
塩は貴重品…
そうですね？

「開門都市」に
流れている
塩の流通量の
95％を
現在
私が掌握して
います
私が生きて
人間界…地上に
帰らなければ
取り引きを
止める手はずに
なっています

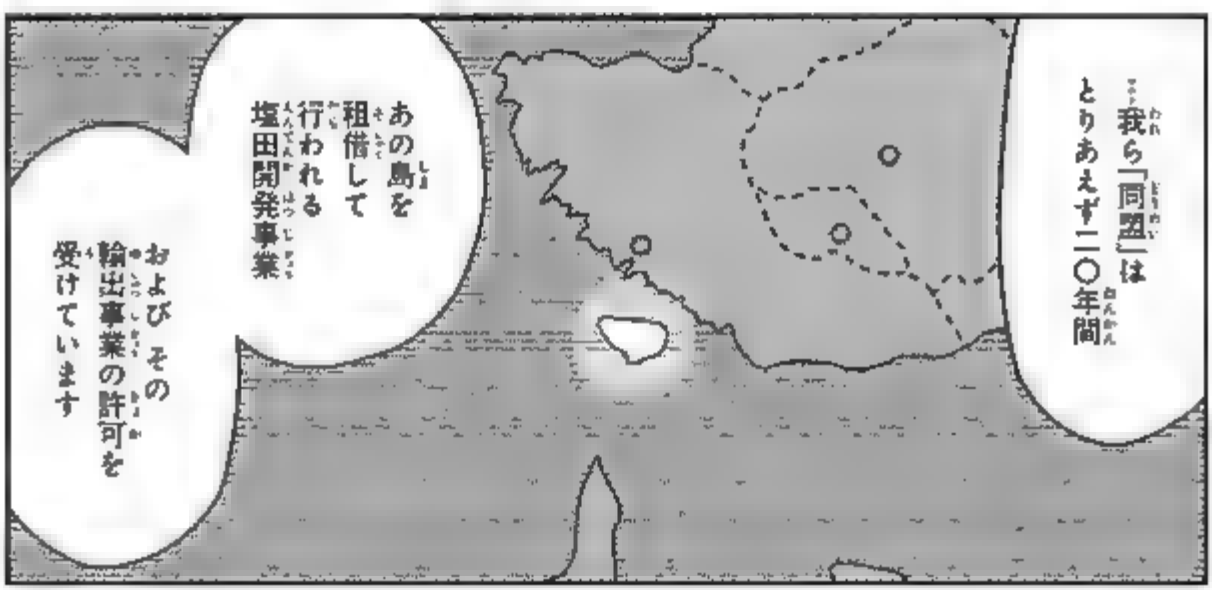
…生ける者にとって
塩はなければ
ならぬもの
塩がなければ
命を落とす者も
出るでしょう
何が
欲しいのだ！
我の首か!?
…いえ

「私と戦って
負けた」
という
ことにして
いただければ

…なぜかは知らんが
心底イヤそうだの
当たり前です
私は商人です
今回のような
圧力をかける
交渉など
好ましくはない
ましてや
個人のプライドを
対価に取るなど…

どうして
こんなことに…
…
あ～もう
やめです！
やめました!!
ぬ？

ここに極光島
塩田開発の計画書
および その生産量
塩の品質
輸送計画
コスト計算に
関する資料
それらに基づいた
事業計画書が
あります


我ら「同盟」は
とりあえず二〇年間
あの島を
租借して
行われる
塩田開発事業
および その
輸出事業の許可を
受けています

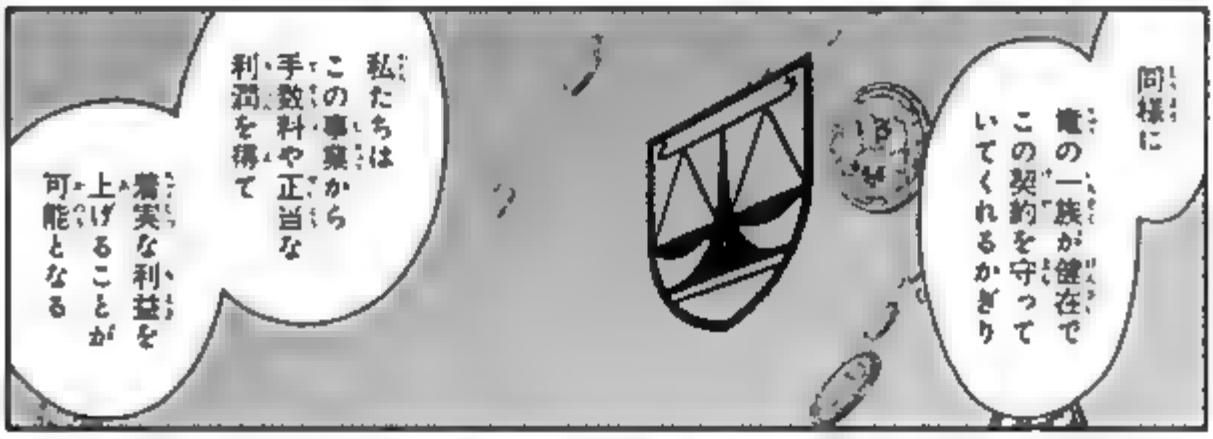
率直に
申し上げる
我らは
この事業全体を
「分割」する
用意があります

この事業に
出資して
いただきたい
見返りとして
出資額に応じ
相応の割合の塩を
毎年お届け
しましょう

塩を売ってやるから
恩に着よというわけか
どんな暴利で
売りつける気だ？
そういうこととは
根本的に違います
これは一種の
協定だと考えて
いただきたい

協定…？

この契約が
存在するかぎり
私どもの組織
「同盟」は
竜の一族に塩を
供給します
この事業が
発展すれば
地下世界で塩を
扱うことにより
竜の一族が
交易での
より大きい繁栄を
願うことも
可能でしょう


同様に
竜の一族が健在で
この契約を守って
いてくれるかぎり
私たちは
この事業から
手数料や正当な
利潤を得て
着実な利益を
上げることが
可能となる

竜の一族の繁栄が
我らの利益に
我らの利益が
竜の一族の繁栄に
つながるように
「私は新たな約定…
契約を結びたい

お解りの
はずです
これは
塩の交易を媒介とした
安全保障条約です

私どもは
この魔界に
販路を持ちたく
願っています
そして
地下世界における
交易において
竜族こそが
パートナーとして
もっともふさわしいと
敬意と期待を
抱いているのです

依頼者は
公女か？
その件については
いっさいお答え
できません

よかろう
この話
検討しよう
…ありがとう
ございます

出資については
おいおい詰める
べきであろうが
人間界の金貨は
持ち合わせがない
砂金で払っても
かまわぬで
あろうな？
もちろん

負けた
…公女には
そう言って
おこう

黒騎士殿に
詫びる必要が
あるかどうかは
じきに
わかるので
あろうな
ははは
ははは

お疲れですね
まおー様
ああ…

この二つの
どちらかだけでも
懐柔できれば
楽になるのだが
予想は
していたが…
やはりネックは
蒼魔族と
獣牙族だな
開戦派の
2トップと
いったところか

蒼魔族は
表面上は
最敬礼だが
話はさっぱり
通じてる
雰囲気がない
人間と和平？
魔王様は何故を
お上手ですね

獣牙族の奴らなど
はなっから話を
聞こうともしない
戦争!!
戦争!!

お疲れの
まおー様に
いい知らせですわ
依頼していた
品物が届きました
ガバッ
おお！

内容も確認済み…
あとで私が届けに
参ります
こちらがリストです
ありがたい
これで あの氏族は
なんとかなりそうだな

勇者は？
懐柔工作に
行っておいでです
勇者様…
黒騎士にしか
出来ない方法で

黒騎士…!!
この巨体を軽々と…!?
なんて力だ これが…

魔王を侮辱した件
一〇人抜きで謝罪してもらうぞ
銀虎公
……
よかろう
しかし
もう7人抜きだぞ…
黒騎士の強さは本物か…
銀虎公！
私がヤツを止めてみせましょう！
我が剣の疾さは獣牙一！
見切れるか黒騎士！

……
我が剣を防ぐとはさすが…
!?
ヒュン
わぁぁぁぁぁ
ヒュン

ぬぅぅぅ
大きすぎかーっ
五神将！
五神将はおらぬか！
ようやく出番か…
おおお…
ここに
ざれっ…
ずん

ずん…
ずん
また でかくて強そうなヤツが…
獣牙族は 屈が厚いなあ
でかさだけなら南氷将軍並みか？
…呪文なしじゃ結構キツいぞ

オレは
五神将が一
赤鮫将軍
ゆくぞ
黒騎士!!

こーゆー手合いは…
いなすッ！

ズドド
ドドド
ドドド…
今
9人抜きだ
引くなら
ここだぜ
くッ…
銀虎公殿に
申し上げる！
集まった
皆も聞け！

魔王は弱い！
そんな…？
バカな…
魔王なのに…？
銀虎公殿は別格として
今戦ったどの勇士にも魔王は戦場では勝てないだろう

だが本当の強さとは何だ？
確かに銀虎公殿は戦場では無双の勇士だろう
しかし
万の大軍にたったひとりで勝てるか？
勝てはしまい

その時は銀虎公殿も軍を率いて戦うだろう
それが長の強さというもので
己ひとりの力では成し遂げられぬことをも成し遂げる氏族の長としての器だ

魔界には獣牙族をはじめ 屈強な氏族たちが多くいる
己のみが強く軍を率いることのできない魔王よりも
己は か弱くても大軍を率いて勝てる
そんな魔王の方がこの魔界において頼りがいがあるのは自明のことだろう
魔王は軍の司令として比類ない強さをもっているぞ

さらにいえばかの魔王は
それさえこえる能力をその身に秘めている

それは戦をせずに勝つ力だ
一回の剣も交えることもなく誰も傷つけることなく
それでいて望む願いを成し遂げる英知という力だ

かの魔王の目指す地平は遠く誰もが理解できるものではないが…
それでもこの大地に何かを与えてはくれているのだ
魔王が在位してから魔族同士も含めて戦で命を落とした者がどれだけ減ったか

いかがか？
魔王の
強さを認めても
銀虎公殿の強さは
いささかも
揺るがぬ

魔王は弱い
戦場では
力強き腕の力が
必要だ
銀虎公殿の
万夫不当の力が
必ずや必要と
なろう
…わかった

魔王殿に
謝罪すると
しよう
かの魔王殿は
その名にふさわしい
実力をもっていると
黒騎士殿は
魔王の剣だ
その武力が
あるのならば
獣牙一党は
魔王殿を侮らぬ

銀虎公…
だが
しかし
魔王に武力が
必要だという
考えは変わらぬ
今は
我が武将に勝った
黒騎士殿の顔を
立てよう
戦場での采配に
関する話も
そのとおりだと
認めよう
しかし
魔王殿は戦場で
指揮を執ったことも
ないではないか
実際
戦功を立てるまで
あの魔王殿の実力は
まだわからぬ
わからぬものに
信頼は置けぬ

…そんな戦場自体を
こちらはなくしたいんだがなぁ
マン
まぁ
とりあえずはこんな手打ちでいいかぁ

ピ…
ピピ……
コノ貴石は…初めて見るものデス
コチラの鉄鉱石の純度は素晴らしいデス
コレは…いったいドコから…？

人間界…
地上からです
まおー様は
独自のルートで
平和裏にこれを
入手なさいました
ナニ…？
コレを見せて
何とする？
ワレラを
懐柔できる
とでも？
ピピー
いえ…
ただ 判断の材料に
していただければと
人間との取り引きで
これらの鉱石が
安定供給される
という可能性を…
……

人間界…
地上か…
ヤ……

おぉ

やった！
どうした？
何かの知らせか？
鬼呼の姫巫女からの親書だ

「停戦に同意する」
…と
おお
…つっても
あそこは元から
交戦派じゃないよな
いや
この意味合いは
小さくはない

「交戦したくはない」と
「停戦をしたい」では
その示すところが
大きく異なる
鬼呼族は大勢力
であるしな
…機怪族は
どうだ？
子弟さんたちに
送っていただいた
荷物を届けました
大いに興味を
示されていました

獣牙族の方も
魔王の力を認めるって
言質をとってきたぞ
やっぱり
あの手合いは
拳の方が語り合える
みたいだな
ご苦労だったな
勇者
これで
風向きが
変わってきたぞ
整理してみよう

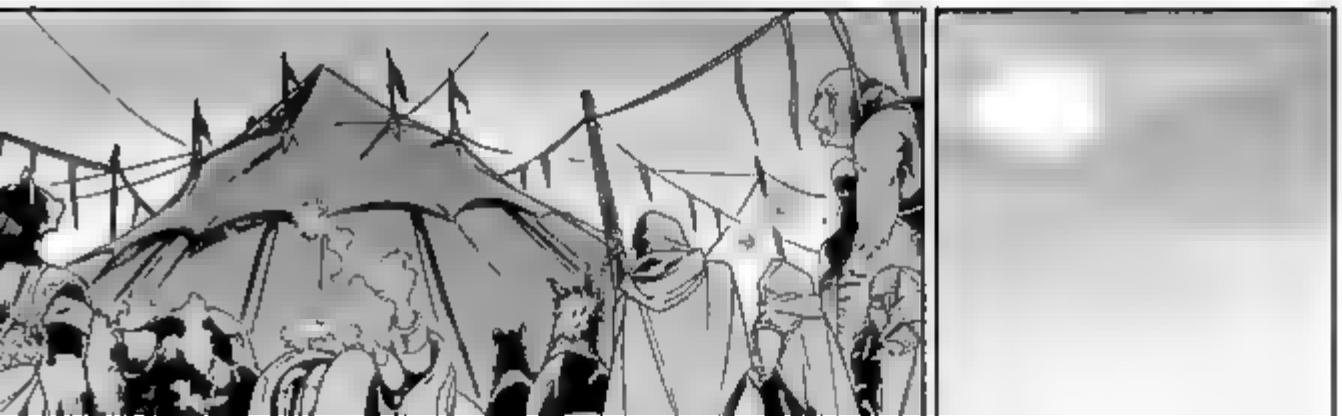
停戦派
魔王
鬼呼
妖精
中立
人魔
竜
巨人
交戦派
機怪
蒼魔
獣牙
これで獣牙族や機怪族に歩み寄りが見られれば…
停戦派の方が多数となり他の氏族の判断にも影響があるだろう
巨人族は人間が嫌いなだけで戦いが目的じゃないからな

だけど まだ蒼魔族はぜんぜん攻略できてないんだよな
ですね
いや
一度押してみる時期かもしれん

この件で鬼呼族がアテにできるとわかった以上
他氏族の反応も含めて探るべきだろう
うまくいけば全体の意見の圧力で雰囲気を一気に傍戦に持っていけるかもしれない

そうなれば蒼魔族の一氏族だけでは
そこまで強固に交戦の主張もできぬであろうしな
なるほどな
明日にでも大部族会議を招集しますか？
ああ

最初の激突といこう



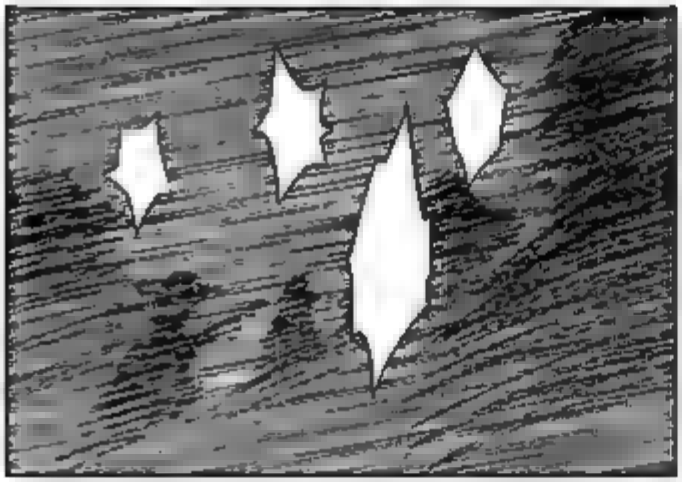
さて
議論も出尽くした感がある
我ら魔界を支える偉大なる八大氏族
その氏族の方々にいま一度
この先の人間界との関係について意見を求めたい
そんなものは決まっている
踏みつくし侵攻すべきだ

おう！
人間（にんげん） 何（なに）する
ものぞ

そもそものところが
我らが緑なる大地に盗賊のように忍び込み
火を放って侵略を進めてきたのは人間ではないか！
しかし
勝ちが決まったというわけでもあるまい

人間とは…
関わり合っても…
被害
増える
だけ…
地上世界の鉱物資源には興味がアル…
それこそ戦って奪えばよいのだ

戦争は多くを
踏みにじり
踏みにじられ
互いに疲弊する
愚かな行為
平和への道を
模索する
べきです



ふん
腰抜けの
妖精族が

ハハ…

私はなにも
停戦して即座に
人間世界と共存
しようだなどとは
考えてはいない
…だが

現在の地下世界と
地上世界の戦力と
人口比を考えると
たとえ戦争で勝っても
人間の地を支配して
維持することは
難しいだろう
極光島が
その証左では
ないか？

当面の間
ゲートが破壊された
「極」には充分な
防衛軍を置き
出入りに
関しては
警戒を続ける

我ら
地下世界にとって
有利で有益な
貿易であれば
制限しつつ
続行してもよいが
人間と
馴れ合う気はない
開門都市を
取り返したとはいえ
我らは侵略を
受けた側なのだ

ただ 現在の状況を見て
戦争を継続するのが
合理的かどうかを
判断してほしい

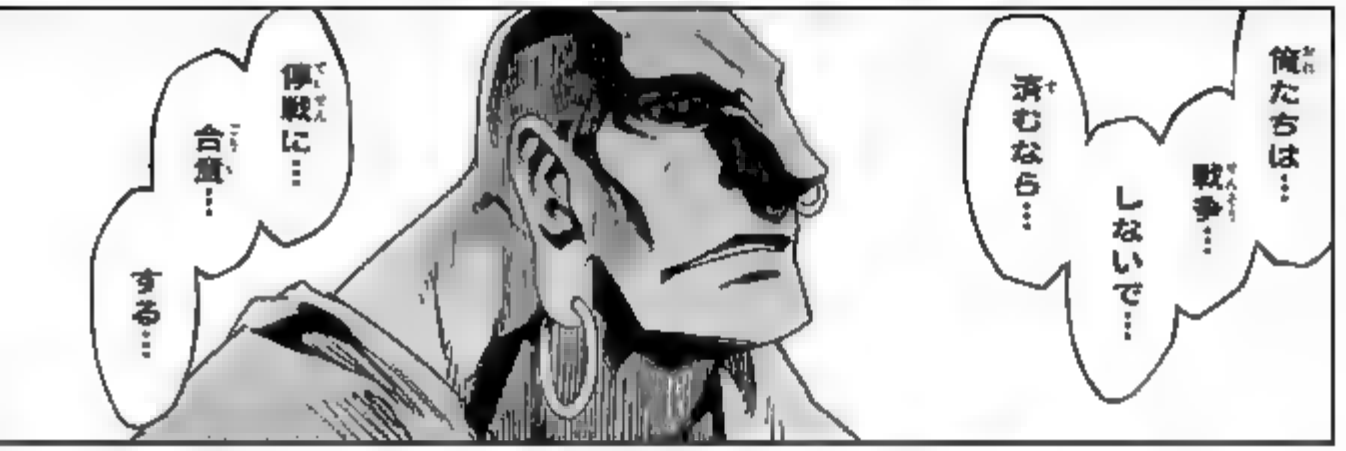
うまい
言い様だな
あれなら反感も
かき立てない
そこは
まおー様
ですから

我ら人魔族は
最初からの意見を
変えるつもりはない
立場としては中立
どちらにも与せぬ
この際 人間は
滅ぶべきだ
彼らには彼らの
罪の深さを炎の中で
思い知らせてやろう

人間どもの
狩り場を
我ら魔族の
物とすれば
遠征にかかる
費用など容易く
取り戻せよう
…ただし
そのための
準備期間として
しばらくの
停戦が必要だと
いうのであれば
その声に
耳を傾けぬ
でもない
!?

我が鬼呼族は
戦争には反対だ
停戦を求める
万事 考え
合わせるに
此度の戦は
我が方の受ける被害が
甚大であろうという
結論に達した

私ども妖精族も
停戦には賛成です
もとより
戦を望んだことは
一度もありません
しかるべき
使いを立てて
人間との交渉に
あたらせる
べきです


俺たちは…
戦争…
しないで…
済むなら…
停戦に…
合意…
する…

停戦するにしろ
地上世界の物資は
ワレラにとって
必要だと判断する
停戦の場合の条件に
何らかの交易取引
もしくは
賠償としての
物資要求をして
いただきたい
——そのような
条件下で停戦に
合意しよう

無念であった
開門都市は
人間から
奪還している
あの地が
征服されたままでは
絶対に合意することは
ありませんでしたがな

このような流れに
なってしまっては
仕方ありませぬ
竜族としても
停戦に合意
いたしましょう

では
とりまとめると…
条件はあれど
停戦に合意できる
とする氏族が六
中立が
人魔族
そして
交戦すべしが
蒼魔族…
このように
なるな

思ったよりも
いい流れだぞ
ええ
獣牙族が
曲げてくれたのが
大きいです
なんて軟弱な
奴らなのだ
各々がた！
魔族の誇りは
どうなされた！
我ら魔族が
人間の風下に立って
なんとする！

しかし
停戦は
魔王様の意志
でもあります
小癪だが
魔王は魔王だ
そう…
だ…
魔王の言葉には
それだけの
重みがある
一考しなければ
なるまい？
敗北主義者
どもが！
あえて
というならば
人魔の意見も
停戦だ
ここで会議の
結果が割れては
またしても■界は
乱世をむかえて
しまうだろう
我ら人魔は
魔族の調和を
望む

どうだろう？蒼魔王よ
ここは曲げてもらえぬか？
――そんなにも
そんなにも魔王の言葉が重いのか!?
では各々がたに問おう！
たしかに四十三代魔王「紅玉の瞳」の意志は停戦にありとて
しかしその魔王ご自身が決戦を決意されたならどうなさる！
!?

…それは
…仕方ない
魔王の
ご意志であれば
それこそが
我ら獣牙の
勇者の望みよ！
そうであろう
我ら魔族に
臆病な風などは
似合わぬ
敵の血と
名誉こそが
我らに
ふさわしい
しかし
戦争は
諸刃の剣
相手だけでなく
自らをも滅ぼす
選択です
それこそ
魔王の義務であろう
優れた魔王であるならば
魔族の被害を少なく
勝つこともできるはずだ

…何が
言いたいのだ
蒼魔王よ
私が意志を
曲げるとでも？
そうでは
ありませぬ
魔王殿の意志は
尊重いたします
貴公が
魔王であったなら
…ですが
蒼魔王の名において
ここに告げる！

我ら蒼魔の
一族は
ここに
四十三代魔王
「紅玉の瞳」の
廃位を要求する！

終 第二十七話 始祖の激突といこう

第二十六回

支配者に対する弾劾

大権をもつ支配者を
処罰することは難しい。
そして、それを可能にするのが
「弾劾」という政治機構である。

あくまで戦争継続を主張する魔王。
彼の切り札は「魔王を弾劾して降伏することだった。

困難だった大権を握る支配者への弾劾

はるか昔から集団生活を送っていた人間には、常にリーダー的な存在が不可欠だった。当コラムの第一回で紹介したように、地域を治める領主は食料生産から離れるかわりに、その集団の防衛や争いの調停役という仕事を担っていた。

領主が行政官であり司法官でもあったことを考えれば、それだけの責任を一手に背負っていた彼らが支配者だったのもうなづける。国家を束ねる君主も、基本的な部分は領主と同じといってよいだろう。

ただ問題だったのは、人々をよりよく導くための権力を私的に行使する者が現われたこと。そして、領主や国王は世襲されることが常で、民衆が支配者を平和的に交代させる制度がなかったことだ。特に王や皇帝が国家を支配していた中世では、彼らが自身の権力を強化するために身分を固定化したこともあり、民衆は日々の糧を得るのに精いっぱい。一般民衆が王権に対して疑問を抱くようになったのは、科学文明がかなり発達し、日々の仕事に追われながらも考える時間が得られるようになってからだ。

ヨーロッパで啓蒙思想が広まったのは、17～18世紀のこと。被支配者だった民衆のなかに一定以上の資産をもった市民、いわゆるブルジョワ層が現われたことで、ようやく個人の自由や財産権という考えが生まれた。これが民衆に広まった結果、イギリスやフランスでは王権が制限、もしくは打倒される「名誉革命」や「フランス革命」などが起きることになった。

それまで、支配者が弾劾されるようなことがまったくなかったわけではない。ただ、大権を握っている支配者を弾劾できるのは、同等の力をもつ上級貴族に限られていたといってよく、権力闘争という側面も強かった。英仏での革命は歴史的に高く評価されているが、それは民衆が主導したものであることも大きな要因になっている。

なお、現在の日本で弾劾といえば、裁判官弾劾裁判所で行われる裁判官への弾劾裁判が挙げられる。これは裁判官に職務に対する著しい義務違反や怠慢、威信を失墜させる行などがあった場合に開かれるもので、衆参の国会議員が各7名づつ、計14人が裁判員となって審議を行う仕組みだ。

最高権力者である魔王に対する弾劾制度が工夫されていた魔族の規範は、人間のそれと比較して進歩的といえる。

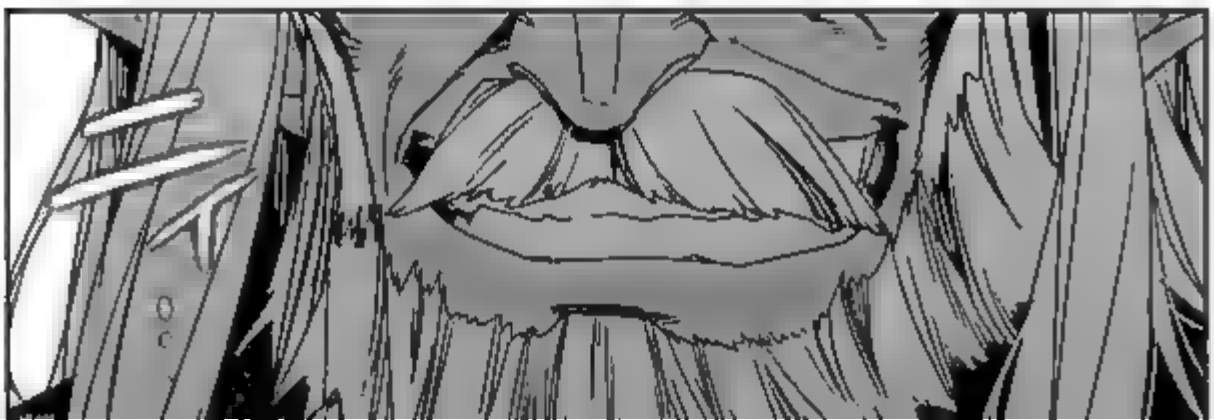
さすがに想定外

まさか 魔界が
人間界と同じ世界に
あったとはな
執事殿は
うまく魔界に潜入
できたでしょうか
爺のことだ
心配はない
にょほほほほほ
…と思う
爺の役目は調査と
和平の可能性の
模索だ
中央との
確執だけでも
不安な時期だし
できれば 今は
魔族との間に
戦争は起こし
たくはない
それにしても…
魔族とは
なんなのか…
魔王とは
どのような男なのか
最近よく考える…
極光島…
いえ
ゲート跡の方角を
ご覧でしたか
ああ
世界を統べる
王…か

我ら
蒼魔の一族は
ここに
四十三代魔王
「紅玉の瞳」の
廃位を要求する！
まおゆう
魔王勇者
第二十八話

魔王の廃位!?
そんなこと
あるのか!?
わかりません
そんなことが
できるかどうか
考えたことさえ
ありませんでした

そのようなこと
許されると
思うてか！
どのような
権利をもって
一介の氏族長が
そのようなことを
要求するのです！



「典範」にも
明記されている
非常に稀な
ことではあるが
第八代の治世に
前例がある
我ら大氏族が
魔王の言いなりでは
ないことの証左であろうな
…「典範」

「典範」によれば
「魔王を除いた
忽鄰塔参加族長の
半分の賛成をもって
魔王を廃位できる」
…とある
すなわち
四名だ
ほほう
使われたことが
一度しかない
権利だが…
前例は前例だ

魔王殿は
その在位の間
一度も戦の経験がない
…そうですな？
人間との戦争
ゲートの喪失
魔界存亡の危機に
我らが頂く王の資質を
問わねばならぬ

魔王たるもの
相応の実力を
もつのが当然
…理に
適うのであれば
それも道
…魔王は
…大きな
…ほうが
…いい

現魔王を
廃位したとして…
新魔王は
どうなる？

魔王が倒れた時と
同じように
星が新しい魔王を
選ぶだろう

幾人かの魔族に
刻印が顕れ
魔王候補者となる
その中から
魔王選定の
武会を開催して
決めればよい

今度こそ
我が獣牙から
魔王を出すのだ
我ら蒼魔族も
忘れてもらっては
困りますな
我ら…
巨人族に…
栄光は…
輝く…

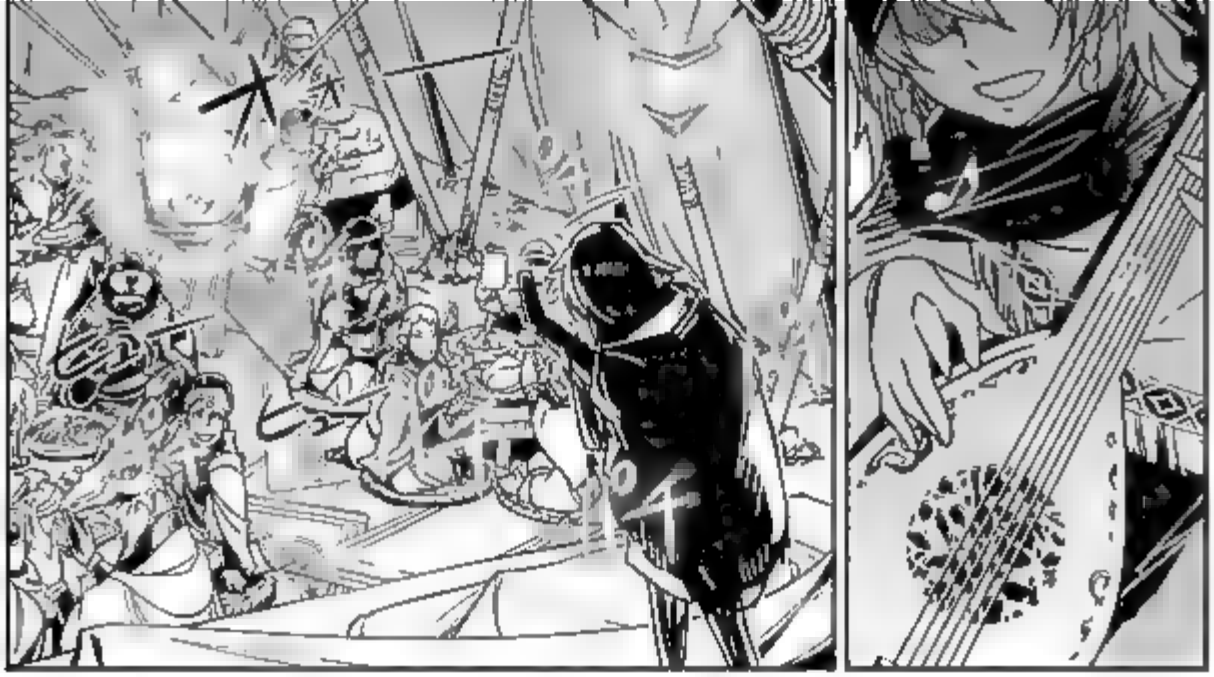
占いに示された
魔王の命脈が
尽きるとは…
このことで
あったか？

では
決を採ると
しましょう
各々がた
いや
待たれよ
は？
これはこれで
重大事
しばし
協議の時間を
いただきたい
何を話し合う
必要がある
己が信じるところの
意思を表明すれば
済むことぞ
それぞれが
それぞれの事情を
抱えているのだ
氏族への
説明もなしに
決めることは
できないことも
あろう
ふん
よいだろう
日没まで
あと二時間ほどだ
採決は日没に
行うとしよう

Archenemy and Hero
28th chapter

第二十八話

典範



お嬢さん
すばらしい演奏でしたぞ
ありがとうおじいちゃん
このあと二人で詩の話でも…
どうですかな？

悪いけど待ち合わせがあるの
ごめんね
ほほほ
ざんねんですな
…局長
情報収集ですぞ？

…首尾は
どうですかな？

後続部隊
八名到着
付近の丘に
天幕を張り
商人に偽装
班編成の上
偵察と情報収集を
開始しています

今のところは
問題ない
ようですな
くれぐれも
人間だと
悟られないように

この天幕街には
少なく見積もっても
六千名以上の魔族が
集まっているようです
周辺の渓谷などには
今少しの護衛などが
分散しており
激しくは
ありませんが
一種の軍事的拮抗が
存在します

中央の天幕の
隣にあるのが
魔王の天幕の
ようです
魔王は
初日に演説を
したとのこと
驚くべきことですが
現在の魔王は女性…
つまり女王だ
とのことです

しかし
以降 姿は
公には見せず
会議に専念
している様子
会議に出席をするのは
八大氏族と呼ばれる
有力氏族
その内容は…

今までに
巷に流れた
噂と合わせて
会議の議題は
地上世界との戦争に
ついてだと考えて
ほぼ間違いが
ないでしょう

それについては
なんとしてでも
確度の高い情報を
入手するべき
でしょうな
引き続き
情報収集に
努めるように
もし
必要であれば
キュッ
「突然死」という
二つ名の由来を
披露せねばなりません
局長って…
確か
かつて勇者と共に
旅をしたという…
ああ

救世の勇者一行…
「黒点の射手」
「突然死」と
異名をもつ
伝説の弓兵
その人だ

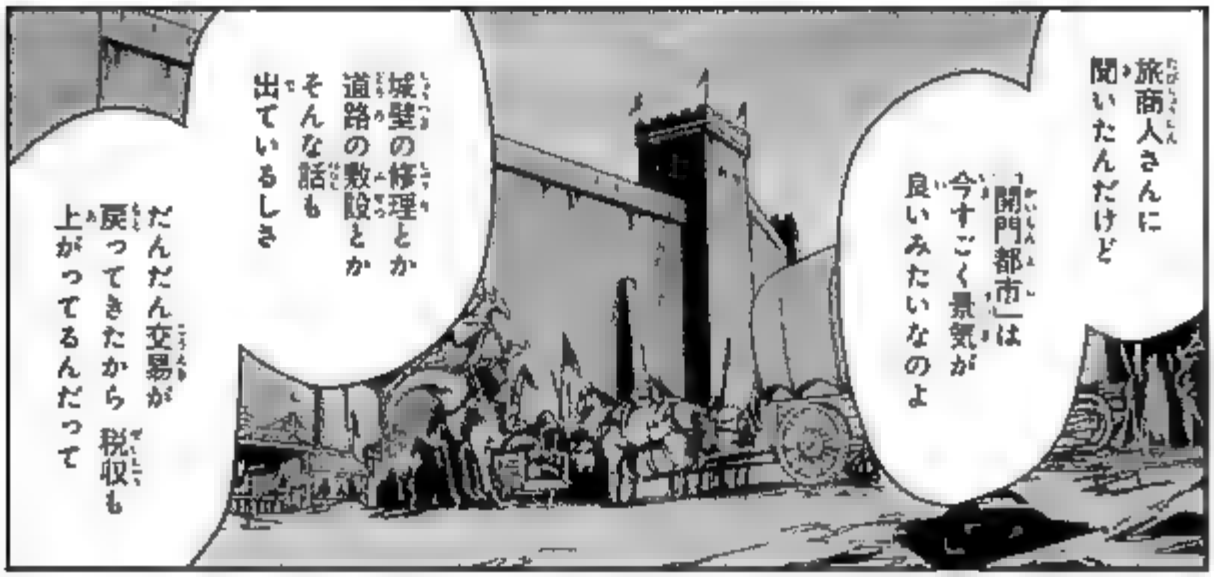
ただいまー
おう
おかえり
ほら
これ おみやげ
あんがとよ
稼ぎは
どうだった？

噂に聞いてた
忽鄰塔だけの
ことはあるわね
いろんな
氏族と会えたし
話も聞けた
収穫は上々よ
奏楽子弟
こっちも
仮設住宅や
天幕 整地
いろいろ
やったけど
モキャ。
モキャ
ひと通り
終わったって
感じかな
土木子弟
それで
仕事が終わったら
また師匠の本を
読みあさってるわけ？
まったく
相変わらずねぇ
まあなー

工夫と設計
管理と運用
土木ってのは
奥が深いんだ
「テキストに溺れる
ことなかれ」って
言われてるでしょう
いっくら学んだって
実践しなきゃ意味なんて
ないじゃないのよ
仕方ないだろ
俺だってもっと
いろんな工事を
してみたいけど
灌漑
水道
道路
堤防
築城
土木工事には
人手も金も
かかるんだ
平民の俺に
そんなコネは
ないしさ

稼ぎにならない技術だなぁ
何を言う
土木は技術の王様なんだぞ
師匠が言ってたんだ
へー
師匠はあれはあれで浮世離れした人だから…
天才だ
浮世離れした乳だったからなぁ
天才だって
まあ…いろいろ不思議な人だったわね
まあなー

ま
それは
いいとして
ほら
出かけるよ
え？
なんだよ？
どこへ？
閉幕まで
見ていかない
のか？
せっかくの
忽鄰塔じゃないか
そりゃあ
魔王様の姿をひと目
見ておきたいけど
閉幕後の人出に
巻き込まれたら
身動きも取れや
しなくなっちゃう
ここでの稼ぎも
ひと段落ついたんなら
さっさと移動しましょ
なるほど


旅商人さんに
聞いたんだけど
「開門都市」は
今すごく景気が
良いみたいなのよ
城壁の修理とか
道路の敷設とか
そんな話も
出ているしさ
だんだん交易が
戻ってきたから 税収も
上がってるんだって

おまけに あそこは
どこの氏族にも
支配されていない
独立都市
なんとか仕事に
ありつけるわよ
そりゃ
いい話だな

行ける？
師匠の本の他には
持っていくモノも
ろくにない
じゃあ
旅立とう♪

でかい仕事に
ありつきたい
もんだ
あたしだって
サーガの一本も
書き上げたいわよ

この空の下のどこかに師匠もいるのかしらね
あの人のことだ元気にやっているさ
私たちの旅路によい風が吹いているといいのだけれど！

やられた
あんな手に出てくるとは予想してなかった
こちらの読みが甘かった…
私も 魔王の権威に頼っていたというのか

…すまぬ
よいところまで
議論を詰めていた
というのに
いや
警告は受けて
いたんだ

――魔法使いから
「典範」を探して
調べろって
それを
突き詰めなかった
俺の責任だ

いや
そうではない
結局は
目先の停戦ばかりを
追いかけて
魔族のなかに
信頼を育てることが
できなかった
私の無為が
招いた結果だ

この二時間で
打てる手がない
あそこまで
はっきりと釘を
刺された以上
私が他の族長に
接触するのは
保身だとしか
とられないだろう
残る手が
あるとすれば…

採決の場にて
魔王廃位に
票を投じた長を
殺しちまう
ってやつか
そうだ
だが
この状況に
なっては
意味がないな

過去には言うことを
聞かなかった長を
消し炭にした
魔王さえいるって
おっしゃってたでは
ないですか
それこそ前例が
あります
だが
しかし
それは
一名だったのだ

つまりは
全会一致のために
その一名を取り除く
必要があったんだ

消し炭という
過激な手段に
目がいくけれど

結局 魔王は他の
七氏族の支持を受け
忽都塔を代表して
粛清したに等しい

この状況で
たとえば四名の長が
私の廃位に票を
入れたとする

その長を
皆殺しにして
決定を破棄させた
としても

「半数の氏族が
魔王を
支持していない」

という事実は
消えることがない

今までも支持を
していたわけでは
ないだろうが

それでも
魔王の名前がもつ
権威に従って
くれていたのだ

蒼魔王は
わかっているのだろうか
ここで決定的な
亀裂が起きてしまえば
また魔族の内部分裂が
始まる
乱世の再来を
自分たちで
招いていることに…

時間だ
評決といこう
ではないか

我ら魔族が
戦を望もうと
望むまいと
現に今は
戦時下である
人間がいつ
攻め込んでくる
やもしれぬ
そのような時に
怯懦な魔王を
頂くとは
氏族の民に対する
裏切りにも等しい
我が蒼魔は
現魔王の廃位に
票を投じる

妖精族は現魔王の
今までの業績を
評価します
魔族同士の争いを止め
紙や土木技術などを広め
魔界の文化に
貢献なされました
我らは月光と
森羅万象にひそむ
小さきもの
かそけきもの
妖精族は
現魔王を
支持します

我が獣牙族にとっては力がすべて
現魔王は一回の親征も行っておらぬゆえにその実力は未知数
我が獣牙族は力計れぬものに信頼は置けぬ
獣牙族は現魔王の廃位を求める

我らが戦に対する求めは先に話したとおりの現状維持
魔王を変えてなんとする
次に選ばれる魔王が戦に狂った狂人でない保証はなく
現魔王よりも力に溢れているという保証もない
我ら鬼呼の民は現魔王を支持する

地上に溢れる宝は
やはりワレラに
不可欠
その素晴らしさを
教えてくれた
現魔王には感謝するが
やはり
ワレラと人間は
わかりあえぬ
人間との
交わりのなかで
一度得た
ワレラが権利を
失われることを
こそ恐れる
——ワレラは
現魔王の
廃位を望む

我ら人魔の中には
魔王を支持する者も
異を唱える者もいる
それらの意見の
片方を尊重し
片方を無視する
ことはできぬ
我らが人魔一統は
この件に関しても
中立を貫かせて
いただく
つまり
棄権だ

…魔王は
…小さ
すぎる…
俺たちは…
小さい人より
…大きな 人が いい…
…股は
なくてもいい…
が…
魔王は… 変わるなら…
変わった ほうが…
いい…

これで
魔王廃位の票が
四つ
廃位の条件である
半分が満たされましたな
魔王は廃位
これで
次代の魔王が
生まれるのだ！

さっそく ふれを出さなければ
在位二〇年 長くはないが 決して短くもない
存命のまま 魔王の座を 降りることができるなど
ある意味 かぎりなく 幸運なことと いえましょうな

黙れ

は？
何を言っているのですか？ 火竜大公
もはや結果は出たのです 今さら何をかばう必要がありません
「黙れ」と言ったのじゃ 我がまだ票を入れておらん！

何を言っている
もう結果は
出たのだ！
竜の一族は
もっとも古くから
魔界の氏族として
成り立ってきた
さよう
ご老公が現魔王を
支持したとしても
結果は変わりませぬ
その長たる我の言葉を
聞かれることもなく
かように重大な決議を
下そうというのか！
だから結果は
変わらないと…
黙れい！
結果云々の話を
しているのでは
ない！
我が一族を
軽んじるのでは
ない！
そのように
言っている!!

ふん
まあ よいでしょう
確かにそれも
一理あるようだ
ぜひ
ご老公の判断も
伺いたい
たとえ その意見が
結果にいささかも
影響を与えられないと
しても…ですがな
…？
ご老公
裏を投じなされませ

……
ええい
何を押し黙っているのだ！
自ら「軽んじるな」「発言を重んじろ」と言っておきながら
沈黙を通すとはいかなる了見か答えていただこう
その態度は我ら八大氏族と忽鄰塔を愚弄することに他ならぬぞ
遅れましたかい？
え？

では
我が竜の一族から
申し上げよう
我が竜の一族は
ここに改めて
新しい氏族を
紹介したい

えーっと
それがしは
東の砦将と申す者
ここに
忽都塔本会議
大氏族会議への
参加を求めて
やってきました

新しい氏族…!?
本会議に参加だと…?
忽鄰塔本会議は魔族のなかでもっとも実力ある八大氏族と魔王が意思決定をする魔界の最高機関
貴様のような木っ端魔族が参加するようなところではないわ!
そいつぁどうも
俺はしがない人間なもんで
人間だと!?
どういうつもりだ火竜大公!
そもそも魔族とはなんぞ?
この地下世界魔界に住むモノの総称であろうがよ
この者は魔界に住んでいるゆえに魔族だ
人間でもあるのだろうがな

そんな理屈が…
「典範」のどこにも
人間を魔族と認めぬとは書いておらぬぞ？
ふ…
あはは

その人間がこの会議に何用なのだ…？
ピー
ガヤガヤ
それをこれからご説明しますよ
俺
あー
それがしは衛門族の族長として氏族四万八〇〇〇を背負い
この忽鄰塔大会議への参加を要求します

な
なんだ
それは
四万八〇〇〇…？
ざわ
この忽鄰塔大会議は
魔王と魔族の中の
有力部族の長による会議
八大氏族などと
決まっていた
わけではない
そもそも機怪族が
参入したのは
たかだか六代前
ではないか
ワレラは
その権利を
勝ち取った
あれは…
戦争の…
結果…
何も戦は
必須ではない
四万を
超える氏族と
すでに会議に
参加している
二氏族の長からの
推挙があれば
それでよい

四万…？
ばかな
それでは
中小の氏族できえ
大会議に参加できる
ことになる
そうだ
そのような民の数で
なぜ有力を名乗れる!?

そんなことは
我のあずかり
知ったことでは
ないわ！
前例があり
「典範」に
記述がある
それだけよ！
それについては
私から説明させて
いただきます

おそらくは前例の
つくられた時代による
要因が大きいのでは
ないでしょうか？
つまり
この前例が
つくられた
当時であれば
四万は
充分な大氏族で
あったのだと
考えられます

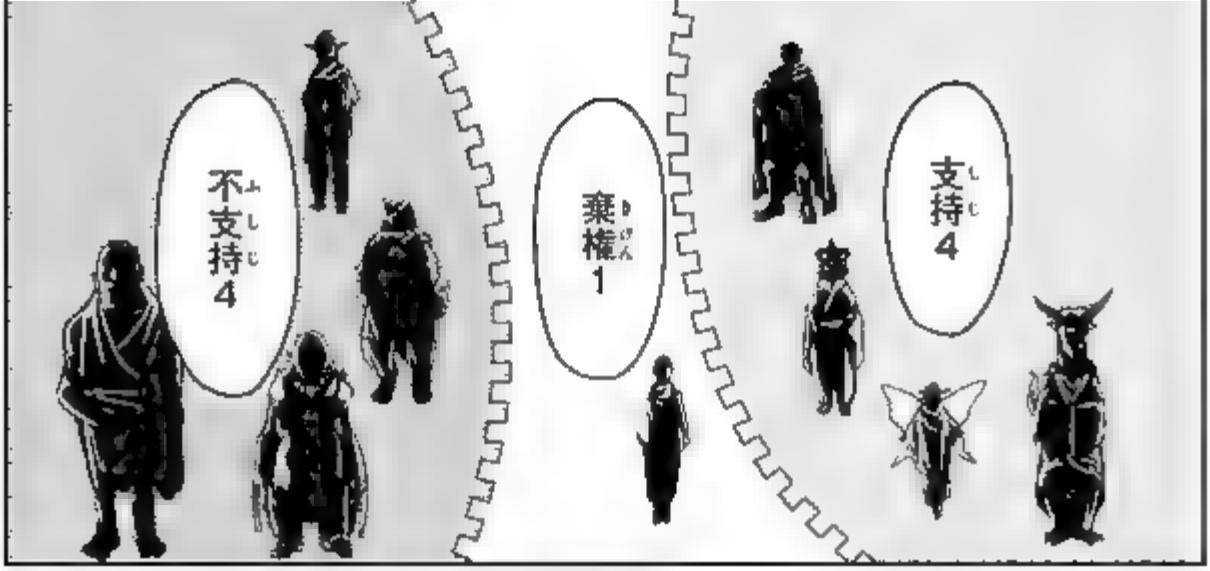
四万で有力だと？
バカげたことを言うな！
しかし
前例は前例だ
イ…
前例は絶対なのであろう？
!!
その前例を用いて
魔王廃位をもちかけた
その決議の真っ最中に
前例を否定しては
事が立ちゆかぬであろうよ
あはははは
前例！
前例！
前例が大事なのであろう？
蒼魔の王！
ぐぬぬぬ

誰が推挙するというのだ！
人間の治める氏族など！
我が後見に立とう
あと一名はそうじゃな…
これは愉快痛快じゃ
よかろう
私が立とう
妖精女王でも引き受けてはくれようが
私もこの人間の言いようが気に入った

こちらが
氏族四万八〇〇〇の
連名書
および氏族の
本拠地たる
開門都市
自治政府の
信任状
ただ今 後見を
いただきました
両氏族の長の
言葉をもちまして
すべての条件を
整えまして
ございます

我らの声は
どうなる!?
この前例は
評決さえ必要
とはせぬよ
手続きが終わった今より
この男は「衛門族」の族長
この会議に参加し
発言する権利を
完全に備えた代表者じゃ
!
…ま
まさか

我が衛門族が望むは
平和と繁栄
すでに我が都市には
多数の人間が暮らし
魔族と手を携えて
やっておりますよ
ルールはひとつだ
「仲良くやって
豊かになれ」
俺たち…いや
それがしと衛門族は
現魔王を支持します
うむ
では 遅くなって
しまったが…
我ら竜族も
現魔王を支持する
さて
蒼魔王が発議した
魔王の不信任…
結果は
どうなったかの？


支持4
棄権1
不支持4

不支持が
半数に満たない
ことにより
魔王の
不信任決議は
不成立
以上をもって
現魔王をこれからも
頂くこととする

チッ
不愉快だ
失礼する！

本日の会議は
ここまでの
ようだな
仕切り直し
としよう
よろしかろうな
皆様方

よし
どうにか
間に合った
みたいだな
助かったぜ

わざとギリギリの
タイミングを
測ってたんじゃ
ないだろうな
ひでぇな
馬を乗り継いで
駆け通しだったんだぞ
ホネなど乙也

よく来てくれた
…しかし
どうして？

女魔法使いさんが
「典範」を届けて
くれたんです

でも
解読するのに
時間がかかって

それで
もしかして
何か役に立てる
かもと思い

信任状をとったり
慌ただしかった
ものですから

それからは
まあ…

大急ぎ
だったんだがな

転移魔法が
あればと
思わずには
いられなかったぜ

火竜の爺さんが
いろいろ
とりはからって
くれたのもあった

なんにせよ
助かったぜ

あとで
感謝せねばな

ふー

手間を
とらせたな
重ねて礼を
言わせてもらう
まあ
ともかく
天幕でひと息
つこう

喉もからからだし
腹も減ったよ
そうですねぇ
駆け通し
でしたもんね
とびっきりの
お茶を淹れますわ

ヒュー…

魔王——!!
終 第二十八話 具現

第二十七回

情報と情報機関

古代からその取り扱いには
重きを置かれていた「情報」。
現代では、それをめぐって
めまぐるしい競争が絶えない。

■塔に潜入した執事たち。敵地の奥深くだからこそ貴重な情報も収集できるのである。

情報を重視して設置された各国の専門機関

「彼を知り己を知れば百戦殆うからず」。これは、紀元前数百年の中国で書かれた兵法書「孫子」にある一節だ。「相手と自分のことに熟知していれば百回戦っても負けない」という意味で、事前に彼我の戦力差を把握し、それに基づいた戦略・戦術を立てることによって、味方の損害を最小限に抑えながら敵へ最大の打撃を与えられ、勝利を収めることができるということである。

情報が重要であるのは軍事に限ったことではない。例えば、本作で青年商人が今後の方針を決定するにあたって行なっていたのは、同盟本部に大陸中の動向を収集し、それを分析することだった。これはすなわち、彼らの活動基盤である経済においても情報が大きなファクターであることの表れである。

もちろん、国家が政策や軍事戦略を決定する際にも情報は欠かせず、世界中の多くの国が専門機関を設置している。こうしたなかでも、アメリカのCIA（中央情報局）や旧ソ連のKGB（ソ連国家保安委員会）、イスラエルのモサド（イスラエル諜報特務庁）などは特に有名で、映画や小説で見聞きしたことがあるはず。また、インターネットの普及などで社会の情報化が進んだ近年では、外国の暗号や通信情報を解析しているアメリカのNSA（国家安全保障局）も注目されることがある。

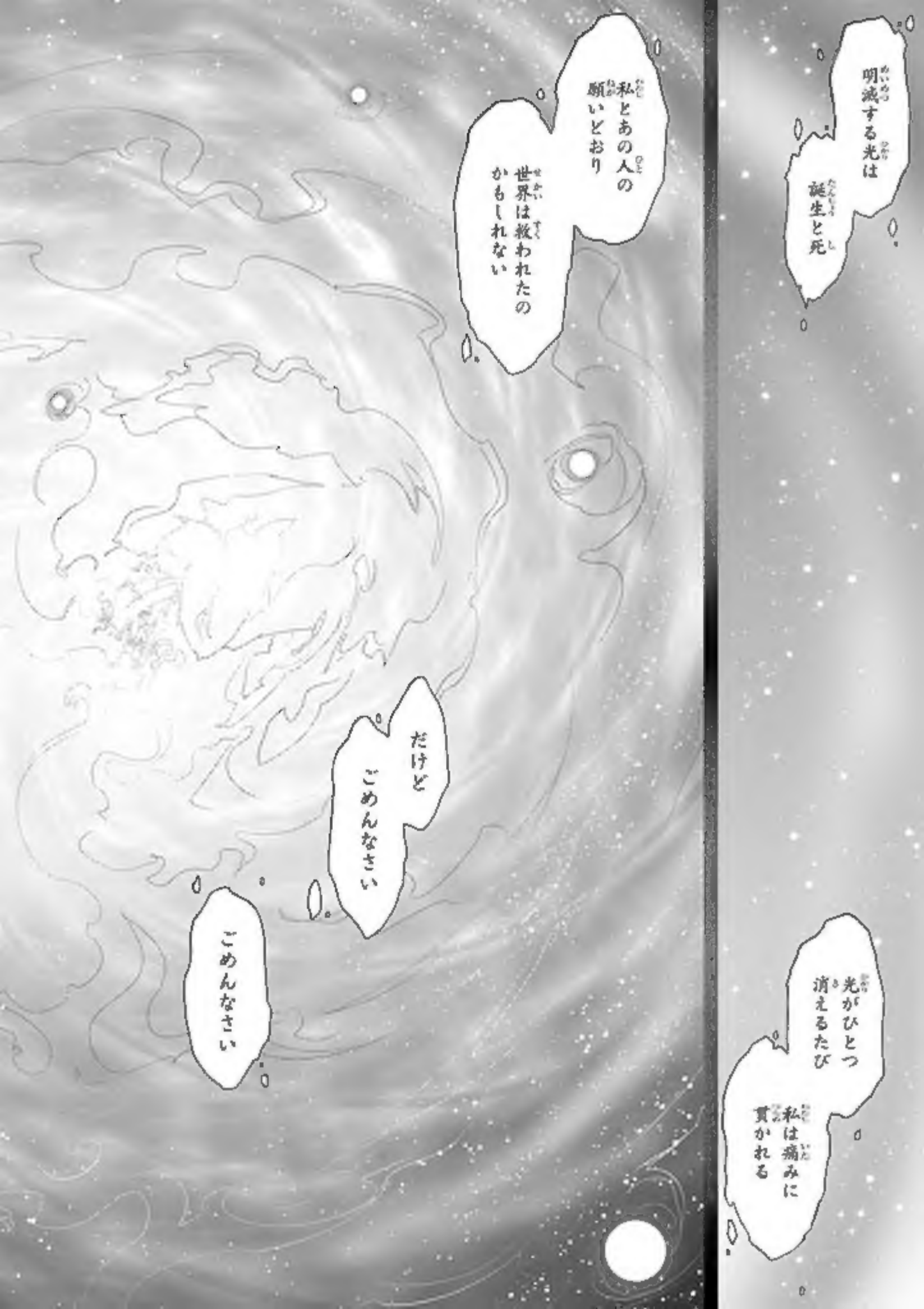
組織によって異なるが、こうした各機関は公開・非公開を問わず必要な情報を入手・解析し、そこから情報の裏にある思惑を読み取ることが目的であることは、共通した点といえる。

情報をいち早く入手して相手の思惑を知ることができれば、対策を講じることができる場合もある。特に国家の安全保障という分野では、後手に回れば国家存亡の危機を招きかねず、神経を尖らせるのは当然なのだ。

こうした機関は合法的な手段で情報を集めることが多いが、時には非合法な手段も使うことがあるという。それらは内部告発などによりたびたび話題になるものの、多くの場合は公的に認めることはない。

執事がもっとも注目しているのは部族長会議。その内容によっては即時対応するつもりか。

ごめんなさい
んなさい


明滅する光は
誕生と死
光がひとつ
消えるたび
私は痛みに
貫かれる
私とあの人の
願いどおり
世界は救われたの
かもしれない
だけど
ごめんなさい
ごめんなさい

すべての人々に
救済を
世界に
永久の平穏を
世界を引き裂いたのも
この私
それは
許されない罪
そして
願わくば
再会を——

角川コミックス・エース
まおゆう魔王勇者「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」(8)

漫画：石田あきら
原作：橙乃ままれ
キャラクター原案：水玉螢之丞・toi8

発行日：2013年8月26日
発行者：井上伸一郎
発行所：株式会社 角川書店

©Akira ISHIDA 2013
©2011 Touno Mamare/PUBLISHED BY ENTERBRAIN,INC.

角川コミックス・エース
『まおゆう魔王勇者「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」(8)』
（2013年8月26日初版発行）に基づき制作

BOOK☆WALKER